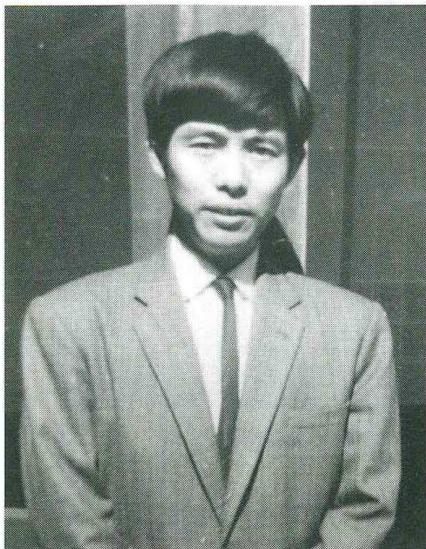


一位一刀彫に生涯をささげた 永富 伸一

田中 彰



息子が撮影した永富氏（昭和55年頃）

宝村蔵柱の荒原集落に生まれました。先祖は平家にゆかりがあるとみえて、荒原の本家の墓地には「平清盛三男魂」と刻まれた墓碑があるといいます。蔵柱の小学校に在学中、修学旅行で高山に来て、一刀彫との運命的な出会いがありました。その時、高山の一刀彫に魅せられ、自分の進む方向を密かに決めたのだと、後

永富は、昭和十二年、旧上宝村蔵柱の荒原集落に生まれました。先祖は平家にゆかりがあるとみえて、荒原の本家の墓地には「平清盛三男魂」と刻まれた墓碑があるといいます。

彫刻士・永富の座右の銘は「天上天下唯我独尊」だといいます。



高山の文化を高めた人々

一位一刀彫に生涯をささげた 永富 伸一

田中 彰

に話しています。

中学校卒業

後、高山の鈴木彫刻に弟子入りし、そこで寝泊りをして技を磨きました。六、七

年経つてから独立し、七日町に三十二歳まで居住、昭和三十七年には岐阜県美術展に入賞しています。昭和四十三年、上岡本町に新居を構え、昭和四十五年に結婚、三人の子どもを育てました。

永富は一刀彫を制作する時、同じものをたくさん作ることを好まず、注文を受けてからその一品に心血を注ぎました。仕事場は上岡本町の自宅三階で、窓からは松倉の山々が見える見晴らしの良い場所です。

彫るのは夜が主で、好きな晩酌を済ませてから、制作は鶏が鳴く明け方になることもあります。作業台に向かえば、すぐ彫れるというものが、実際にみると、なかなか決めるのが難しい気分になります。

永富は、昭和十二年、旧上宝村蔵柱の荒原集落に生まれました。先祖は平家にゆかりがあるとみえて、荒原の本家の墓地には「平清盛三男魂」と刻まれた墓碑があるといいます。蔵柱の小学校に在学中、修学旅行で高山に来て、一刀彫との運命的な出会いがありました。その時、高山の一刀彫に魅せられ、自分の進む方向を密かに決めたのだと、後



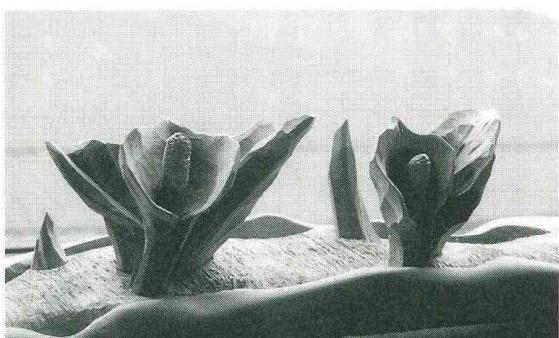
「河童」

の様子を一列に彫り、台座をえても、本人はまだ完成はしていないと納品はしませんでした。

そうして作られた作品の一つである「河童」を見ると、今にも動き出しそうなリアルな体躯をして、鑑賞する人を驚かせます。顔の表情がまた良い。目線は遙か彼方を見て、しっかりととした永富の志を表わしているようです。

永富には意外な趣味がありました。それはギターで、一時期、高山古典ギター研究会に属し、活動していました。

平成四年、永富は高山市の「祭屋台修理技術者」に認定され、高山・祭屋台保存技術協同組合に加入、屋台の彫刻修理を担うことになりました。高山祭石橋台、日枝神楽台、犬山の浦島台、遊漁神車、小牧の西王母車などの彫刻を修理しています。私はそのころ市職員として屋台修理の担当をしていたので、修理状況の検査のために訪問し、「納期をよろしく」と何回も頼んだ



「水芭蕉」

ものです。しかし、いつも屋台彫刻の修理の仕事はすばらしい出来栄えでした。

平成八年に中部通産局長表彰、飛騨クラフト協会奨励賞、

平成九年には伝統工芸士認定を受けるなど多くの賞を得ま

した。晩年に彫った「水芭蕉」という作品は舊から満開まで

の様子を一列に彫り、台座を白太に、土と水芭蕉を赤太に、

葉の先が白太になるよう工夫した秀作です。平成十年、六

十一歳で没した永富の生涯の想いが込められているのでは

ないかと思います。

生前、永富は「仕事がした

いだけ、欲しいものは他に何もない」ということをよく言つ

ていたといいます。小学校の時に見た一刀彫を見て深く感

動し、一念発起して彫刻士になつた永富伸一の作品は、今

も人々に飛騨の匠の伝統と心

意気を感じさせてくれます。